



平成25年11月25日  
卓話『岩倉使節団の今日的意義』

西村あさひ法律事務所 パートナー弁護士  
一橋大学大学院国際企業戦略研究科 教授  
ハーバード・ロースクール 客員教授

岩倉 正和 様



今日は私から6代前の岩倉具視がアメリカ、ヨーロッパに全権特命大使として訪問した時のお話です。

ペリー提督が来て日本は開国し、諸外国と修好通商条約を結ばされたわけですが、それは非常に不平等なものでした。条約には1872年に見直すことができるという条項が入っておりましたが、それは明治になって僅か4年後のことです。不平等条約の改定は政府の喫緊の課題でしたが混乱する国内を治めるのに時間を取られ、準備できていませんでした。岩倉具視が外務卿のとき、翌72年に条約改定の機会があることに気がつき、大慌てでアメリカ、ヨーロッパに行くことを決めました。明治政府がまだ確固たる形を作つておらず、国内では反乱なども起きている段階で、右大臣である自分が欧米に行くというのは大変だったと思います。大久保利通や木戸孝允、伊藤博文のような人たちをメンバーとしましたし、蒸気船で何百日もかかるわけですから、その影響は計り知れないわけです。この段階で自分が使節団を率いていくことを決めたこと自体がまず岩倉の功績ではないかと思います。

使節団はアメリカで大変な厚遇を受けましたが、日本はこのときアメリカの政府やビジネス社会から見るとおいしい存在だったわけです。ホワイトハウスでの歓迎会には金融界のトップが来ていて、日本がこれから国を作るのに必要となる資金を集めための債券を発行する際、アメリカの金融機関が全面的に手伝つてあげるということを持ちかけました。岩倉たちが偉かったのは、それはウェルカムだと言いながら何の約束もしなかつたことです。それがこのあと日本がアメリカの金

融機関に支配されずに済んだ理由だと思います。

一番の目的だった条約改定交渉は実は失敗しました。条約交渉の技術を全く知らなかつたので、天皇から権限を明確に貰わなかつたんですね。アメリカ政府からそれを指摘され、そのための大久保利通と伊藤博文はまた日本に戻つて、天皇から権限を頂戴し、再度ワシントンに戻つています。その間交渉ができないため、岩倉たちは毎日いろんな所を見学しています。使節団は国務長官から、交渉権限の有無さえ分からぬようない状態では、とても条約改定の交渉なんかできないからそれは次の機会とし、今回は欧米先進国の文化、制度、技術等を学んだ方がいいというアドバイスを受けました。岩倉もそれを受け入れ、使節団の目的を変えたわけです。

この訪問による教訓は外交交渉の進め方を初めて知つたこと、西洋の先進文化を目のあたりにして、どれだけ自分たちが遅れているかを理解したことだと思います。使節団はその後ヨーロッパに渡つて産業革命まつ盛りの各国を2年近くの間視察し、帰国後、日本の産業や教育の発展に貢献しました。

私が岩倉使節団を評価するのは、彼らが次の世代のために何をすべきなのかを考えたことだと思います。我々はその精神をもう一度思い出すことが求められていると思います。

ありがとうございました。

